

Wordsworth の 人 間 観 の 一 側 面

— 自然愛から人間愛への過程 —

An Aspect of Wordsworth's View of Man
—How Love of Nature Leads to Love of Man—

小 田 友 弥

Tomoya ODA

(昭和57年11月26日受理)

I

“The Recluse” の Prospectus の中で、人間の精神は、「私の詩の主たる領域」¹⁾と述べていることから窺えるように、William Wordsworth は人間の精神活動を凝視し続けた詩人であった。彼にとって、人間の精神は、自然とともに主要な考察対象であった。だが精神活動に取材するにしても、それを扱う手法は詩人の姿勢によって千差万別である。Wordsworth の精神に臨む姿勢を、我々は、例えば1802年6月7日の John Wilson 宛て書簡に見ることができる。

You have given me praise for having reflected faithfully in my poems the feelings of human nature I would fain hope that I have done so. But a great Poet ought to do more than this he ought to a certain degree to rectify men's feelings, to give them new compositions of feeling, to render their feelings more sane pure and permanent, in short, more consonant to nature, that is, to eternal nature, and the great moving spirit of things. He ought to travel before men occasional as well as at his sides.²⁾

Wordsworth はここで、Wilson の “The Idiot Boy” 評に答える形で、自分の詩人観の一端を明らかにしている。彼によれば、詩人は、忠実に人間の感情の動きを描くだけでは務めを果たしたことになる。この点で、彼の姿勢は、心理の深層に潜むものがたとえ醜悪なものであっても、あばきだしさえすればよい、といったものではなかった。むしろ彼は、人間の本性は善良で尊厳性にみちたものと考え、そうした人間像を読者に提供し、彼らをその像に近づけようとした。そのために、Wordsworth は、人間の精神を扱う際には、その中に存在する不滅で善良なものを探求していた。

Wordsworth がこのような考えに到達した大きな理由はフランス革命であった。革命の初期の段階では、この革命が、人間の善性と尊厳性を証明する聖戦のように思われたので、彼は革命を強く支持していた。しかし、革命のその後の進展は彼の期待を裏切ったために、彼の人間性への信頼は揺らぎだした。そこで彼は、分析的で理性的な方法を用いることにより、この信頼を回復しようと試みた。だがその結果彼は、倫理問題を考える際にも依拠すべき原理を失い、人生の目的をも見失った絶望の状態に陥ってしまったのであった。幸いにして彼はこの窮状から脱却し、再び人間性を信頼できるようになった。しかしながら、フランス革命の後遺症から立ち直れない人々や、人間の真の偉大さを意識すらない人々もいた。そこで Wordsworth は、自分の精神的危機からの回復

過程を辿り、人間性に備わる善性と尊厳性を明らかにし、こうした人々に光を与えたいと願ったものと思われる。

Wordsworth は、以上の様な目的を持って人間の精神について考察するが、その際の彼の思考にみられる特徴は、自然の役割を重視することである。*The Prelude* 第八巻はその好例であり、彼はこの巻に“Love of Nature Leading to Love of Man”という副題を付けて、自然が、人間の勝れた面を示しながら、彼を人間愛に導いたことを証明しようとつとめている。だが Wordsworth のこうした試みを Raymond D. Havens は次の様に評している。自然の働きの中に博愛的人間愛の起源を求める Wordsworth の思考は、十八世紀の思想家からの借物であり彼本来のものではない。こうした考えは、彼の体験から生じた確信ではなく、彼が本能的に感じとった、自然のいつくしみに対する信頼を維持するための理論にすぎない³⁾。

私は Havens の意見は正しいと思う。自然と人間は全く別なものであるから、自然を愛することにより人間の精神に備わる長所を知り、人間を愛するようになるということは、ありえないことであろう。しかし、自然愛は人間愛に至るという Wordsworth の主張に耳を傾けることには、それなりの意義があるように思える。何故ならば、この主張をする際に Wordsworth が用いている論証の方法自体が、注目に値すると考えられるからである。ここで彼が使用している論証の形態は、彼が他の分野で用いているものと類似している。従って、その形態を研究することは、彼が直面していた問題の一端を明らかにすることに通ずるであろう。小論において、私は以上のような意図のもとに、主として *The Prelude* 第八巻前半にみられる Wordsworth の人間観を検討してみたい。

II

The Prelude の筋の展開は大河の流れのようであり、Wordsworth の成長にあわせて直線的に進行はせず、再三蛇行や遡行を重ねる。第八巻もそんな巻の一つである。第七巻には、ケンブリッジ大学を卒業後、ロンドンに出て、大都会の諸相に触れ、人生についての考えを成熟させる Wordsworth の姿が描かれている。ところが、第八巻において、Wordsworth は一転して自分の少年時代にたちかえり、自然との交流の中で、自分の人間観がいかにして形成されたかを述べている。

The Prelude 第八巻は、Helvellyn 山の麓で、自然にいだかれながら、人々が交歓する市場の光景描写ではじまっている。次に Wordsworth は、自分が自然よりうけた恩恵へと想いを向ける。

With deep devotion, Nature, did I feel
In that great City what I owed to thee,
High thoughts of God and Man, and love of Man,
Triumphant over all those loathsome sights
Of wretchedness and vice; a watchful eye,
Which with the outside of our human life
Not satisfied, must read the inner mind;⁴⁾

Wordsworth は、人間社会の中で生きていくうえで大切な二つのものを自然から授かり、それらは、いとましい都市生活においても消滅することがなかったと言う。一つは、神と人間についての気高い想念と人間愛であり、他は、人間の外観に満足せずに、精神の働きを読みとろうとする「油断ない眼」(“a watchful eye”)である。詩人としての Wordsworth を特徴付けるものは、想像力と観察力の卓越性であるが、ll. 62—68にあげられた二点は、彼の想像力と観察力に関連している。

つまり、“High thoughts of God and Man” (l. 64) のうち、“God” をひとまず除外して考えるならば、人間についての気高い想念は想像力によって養われ、「油断ない眼」は観察力の結果、と見做しうるであろう。それ故に、Wordsworth は、自然が彼に与えた二つの力の総合作用によって、彼の人間観を築いたことになる。Wordsworth の人間観の考察は、以上のような二つの側面よりなすべきものであるが、紙幅の制限もあるので、小論においては、問題を、彼の人間観形成における自然が与えた想像力の役割に限定して論を進めていきたい。

III

Wordsworth が、肉親や遊び友達以外で最初に愛を感じた対象は羊飼いであったが、彼はこの愛の起源を、二つのエピソードをあけて説明している。その一つは次の様なものである。少年時代の或る日、Wordsworth は、霧が山腹を一面に覆う、深く狭い谷を一人で歩いていた。突然、もれくる白日に照らされて、羊飼いと牧羊犬が、霧の切れ目に姿を現わした。周囲を霧がつつみこんでいるために、彼らの立っている場所は、空中に浮かぶ島の様にみえた (Prel., VIII, 81—101)。このエピソードの内容については後で考察する。

続いて、l. 119 以下で Wordsworth は、彼の郷里における自然と人間の関係に触れていく。彼の郷里の自然は、例えば清潮の王たちが営んだ、数奇を凝した庭園内にみられる景観とは趣きを異にするが、美しさにおいて劣るものではない。むしろ、心にいとしく感じられる度合は、そうした庭園以上である。何故ならば、郷里の自然の中には人々が生活をしており、自然と人事が共同して精神に働きかけるからである。こうして、緑の大地 (“the green earth”, l. 166) と人事 (“the ordinary human interests”, l. 167) とは融合し、互いに助長しあいながら、精神に深くしみこんだので、Wordsworth の心の中では、自然と人間が結合され、自然愛から人間愛が導かれることになる。そのために、彼は、彼の身邊にあって、自然の中で労働に携わる、羊飼いに代表される人々に、最初に人間愛を向けることになった。

以上が、*The Prelude* 第八巻にみられる、自然愛から人間愛に至る過程の概略である。このような過程を経て養われた、少年 Wordsworth の人間観はどのようなものであったろうか。この問題を、私は、この過程を二つの角度から検討することにより考えてみたい。

第一に注目すべきことは、自然は、あらゆる事物の外観を変容させる力を持つということである。ll. 81—101 のエピソードでは、羊飼いは、霧のために空中に浮んでみえる所に立っている。こうした現象のために、羊飼いは、一種の神々しさをおびた存在として、Wordsworth に印象づけられたことであろう。これに続くエピソード (ll. 101—119) では、夕日の下で仕事に勤しむ、羊飼いと牧羊犬が描かれているが、Wordsworth の詩では、夕日は霧などとともに、自然の変容力の代表例である。

だが、これらの二例においては、自然の変容力が暗示されるだけであり、変容の結果羊飼いが、どの様な姿となったかが明確に示されていない。次にあげる詩行は、霧と夕日による変容の意義をはっきりと表現している。

Seeking the raven's nest, and suddenly
 Surpriz'd with vapours, or on rainy days
 When I have angled up the lonely brooks
 Mine eyes have glanced upon him, few steps off,
 In size a giant, stalking through the fogs,
 His Sheep like Greenland Bears; at other times

When round some shady promontory turning,
 His Form hath flash'd upon me, glorified
 By the deep radiance of the setting sun ; (*Prel.*, VIII, 397—405)

ここでは、遊んでいる時に、羊飼いに偶然出会った体験が二つ語られている。第一の体験では、からすの巣を探したり、小川で釣糸をたれている時に、Wordsworth は、羊飼いを目撃するが、彼は、霧によって生ずるブロッケン現象のために巨人に姿を変えている。第二の体験においては、羊飼いが、夕日によって光彩を与えられている。以上の二例にあらわれる羊飼いは、霧や夕日によって、外観を変えられているが、この変容によって、羊飼いに崇高さ、輝かしさが付与されている点が重要である。Wordsworth の眼前にあらわれた羊飼いは、自然によって高貴さを与えられていたために、彼は、知らず知らずのうちに、羊飼いに対して、敬意と愛情を抱くようになったのである。

だが、自然による変容は、それを観察する人の心理状態によって、異なった受けとられ方をする。それ故に、我々はこの変容を、Wordsworth の心から照射される “An auxiliar light” (*Prel.*, II, 387) との関連において考察する必要がある。その時、自然による変容は、新たな意義を持つであろう。崇高な景観の中で人間を目撃した際の Wordsworth の心理について考えるためには、まず、*The Prelude* 第一、二巻にみられる、彼は自然観形成過程に触れなければならない。

第一巻に紹介されている、遊びを介して自然に触れた4つの印象的エピソードの中に次の様なものがある (II, 372—427)。少年時代の或る夜、Wordsworth は、羊飼いの小舟に無断で乗りこみ、湖に漕ぎだした。時は夜、暗がりとも明確に区別できない輪郭をもって湖をとりまく山々、その中で、ただ一人小舟を漕ぎだした少年 Wordsworth、しかも彼は、無断で小舟に乗りこんだので、うしろめたいものを感じている。このような崇高な自然と、Wordsworth の孤独感、恐怖感という状況設定は、彼の重要なエピソードに再三みられるものである。やがて彼は、次第に視界に入ってくる、天と地を分けている尾根に目を配りながら、一漕ぎして身をあげた。すると突然、尾根の背後に巨大な断崖の頂きが姿を現わした。これはまるで自分の意志に従って彼に迫って来るようにみえた。予期せぬ現象に驚き、彼は逃れようとして必死に小舟を漕いだが、断崖も移動し、背後から生物のように追ってきたのであった。

And after I had seen
 That spectacle, for many days, my brain
 Work'd with a dim and undetermin'd sense
 Of unknown modes of being ; in my thoughts
 There was a darkness, call it solitude,
 Or blank desertion, no familiar shapes
 Of hourly objects, images of trees,
 Of sea or sky, no colours of green fields ;
 But huge and mighty Forms that do not live
 Like living men mov'd slowly through my mind
 By day and were the trouble of my dreams. (II, 417—427)

これらの詩行にみられるように、この体験の後暫くの間、Wordsworth の心は、「未知の存在様式を持つものについての茫洋たる想い」 (II, 419—420) で一杯になったのであった。この「未知の存在様式を持つもの」が何かは明確ではない。しかしそれは、平常目にしている事物とは異った存在

様式を持つものとして意識されていたことは明らかである。

こうした体験を繰り返すことにより、Wordsworth と自然の結び付きが強まり、彼の胸中には自然愛が芽ばえた。そして、この自然愛から、自然に対する二つの反応形態が生じてきた (*Prel.*, II, 307—341)。一つは、鋭い観察力によって、常人の目にはとまらない、自然の色々な特徴を感じるようになったことであるが、そうした特徴は、不滅の絆で結ばれているようであった。他は “the visionary power” が養われたことである。この二つの反応形態は、「油断ない眼」、「人間についての気高い想念」と関連しており、それぞれに重要である。だが、小論が扱う問題の性質上、ここでは “the visionary power” についてのみ論及する。

“the visionary power” についての詩行は以下のようなものであるが、引用文冒頭の “the same source” は “affections” (l.294) 即ち自然への愛である。

and hence, from the same source
 Sublimar joy; for I would walk alone,
 In storm and tempest, or in starlight nights
 Beneath the quiet Heavens; and, at that time,
 Have felt whate'er there is of power in sound
 To breathe an elevated mood, by form
 Or image unprofaned; and I would stand,
 Beneath some rock, listening to sounds that are
 The ghostly language of the ancient earth,
 Or make their dim abode in distant winds.
 Thence did I drink the visionary power.
 I deem not profitless those fleeting moods
 Of shadowy exultation: not for this,
 That they are kindred to our pure mind
 And intellectual life; but that the soul,
 Remembering how she felt, but what she felt
 Remembering not, retains an obscure sense
 Of possible sublimity, to which,
 With growing faculties she doth aspire,
 With faculties still growing, feeling still
 That whatsoever point they gain, they still
 Have something to pursue. (*Prel.*, II, 320—341)

Wordsworth は、嵐や星空の下といった、崇高さを漂わす景観の中に一人佇む時、聞こえてくる音の中に、精神を高めるものの存在を感じ、大地の霊妙な言葉や、風に住まうものの声を聞くのであった。こうした束の間の精神の高まりを幾度も経験すると、精神は、感覚で把握した個々の事物を忘れても、その際の感じ方を気憶し、「崇高のもうろうとした意識」(II.336—337)を持つことになる。そのために、自然の景観に接する時、精神はこの意識に促がされて、類似したものを求めるようになる。このような心理作用が “the visionay power” と呼ばれるものであろう。従って、“the visionary power” の活動の根源には、「崇高のもうろうとした意識」があるが、この意識は、自然との交わりを重ねるうちに、精神に備わる反応の形態である。それ故に、こうした心理作用は、別の角度からみれば、精神が「崇高のもうろうとした意識」を事物に投射し、変客させることでもあ

る。Wordsworth は、精神のこの変容力を “the visionary power” と呼ぶわけであるが、我々は、この力を想像力と同一視できよう。

Wordsworth は、早くから想像力の意義を認識し、詩創作や倫理についての思索において重要な役割を与えているが、問題は、この場合において、想像力によってとらえられるものは何か、ということである。引用した詩行では、精神の束の間の高まりが、「崇高のもうろうとした意識」の原型になっているが、この高まりを引きおこすのは音である。II. 321—329において、視覚と聴覚は対蹠的な働きをしており、前者が現象の世界を知覚するのに対して、後者は、「音の中であって、事物の形にとらわれない、高揚した気分を与える力」(II. 324—326) に感応するのである。そしてこの力は、それについての記述から判断すると、現象界の事物とは異った存在様式を持つように思える。このような存在様式の二重性は、第一巻 II. 417—427 の「未知の存在様式を持つものについての茫洋たる想い」に関する記述にもみられるものであった。又、第一巻 II. 372—417 と第二巻 II. 321—329を比較すると、双方に、夜、崇高な自然、孤独な Wordsworth といった類似した状況設定があるのに気付く。こうしう状況は、Wordsworth の想像力の活動を促し、彼の想念が、二つの事例において同じ軌跡をたどるように方向付けていたと考えられる。以上の点より、“the visionary power” で Wordsworth が把握したものは、第一巻 II. 417—427 で記述されたものと同性質のものであったと推測されるのである。

これまで述べてきた、想像力に基くものの見方は、Wordsworth が17才の頃に一つの頂点に達したが、その時彼は次の様な心境になった。

I was only then
Contented when with bliss ineffable
I felt the sentiment of Being spread
O'er all that moves, and all that seemeth still,
O'er all that, lost beyond the reach of thought
And human knowledge, to the human eye
Invisible, yet liveth to the heart,
O'er all that leaps, and shouts, and sings,
Or beats the gladsome air, o'er all that glides
Beneath the wave, yea, in the wave itself
And mighty depth of waters. Wonder not
If such my transports were; for in all things
I saw one life, and felt that it was joy. (Prel., II, 418—430)

ここでも、存在様式の二重性についての思索がみられ、「未知の存在様式を持つものについての茫洋たる想い」は、“the sentiment of Being” と表現されている。それは、思考や視覚ではとらえられないが、森羅万象にゆきわたっているのが感じられる。そんな時、Wordsworth は、全ての事物は “one life” を営んでいると想うのである。この事物の一体感を統括する “the sentiment of Being” は、現象の世界とは異った極めて高い存在様式を持っている。従って、そんな高度な存在に、あらゆる事物があずかっていることが実感されるならば、事物の本質も又、ある意味で高度なもの、と感じられる筈である。事物についてのこのような想念が、引用した詩行にみられる至福感の源になっているのであろう。

私は、これまで、Wordsworth の自然に対する反応形態について考察してきた。次に、この考察を念頭において、もう一度第八巻における羊飼いと遭いのエピソードにもどり、その際の Words-

worth の心理を検討してみたい。ここでは、深い谷という場面自体が崇高な趣きを持つが、更に霧がたちこめている。第一巻 II. 372—427 では、時間が夜に設定されていたが、羊飼いと出会うの場面では、霧が夜の役割を果たし、Wordsworth の視覚を鈍らせ、想像力の活動を促したと考えられる。又、こうした自然の中で、Wordsworth は一人であり、彼の心には恐怖感さえ潜在していたのではないだろうか。このような諸々の要因のため、Wordsworth の想像力は、彼をとりまく景観自体から、「未知の存在様式を持つものについての茫洋たる想い」を抱きうるまで高まっていた、と推測できるのではなからうか。

もし、「未知の存在様式をもつもの」についての想念が “the sentiment of Being” の原型であり、羊飼いと出会った時、Wordsworth の想像力は、周囲の景観の中に、そのようなものを感じうる程高まっていたと考えることが許されるならば、そこから次の様な結論を導くことができよう。先に触れたように、このエピソードにおいて、羊飼いは、自然の変容力により外観を高められ、崇高な自然景観の中に配置されている。それ故に、羊飼いは、景観を汚がす異物ではなく、むしろその一部となって全体の中に溶けこんでいるように思われたであろう。とすれば、このエピソードを、*The Prelude*, II. 418—430 に描かれている “One life” の心境のプロトタイプと位置付けることも可能であろう。既述のように、このような心境の際の Wordsworth には、あらゆる事物が “the sentiment of Being” にあずかっているの、事物の本質自体も高いものとして感じられたのであった。とすれば、景観に溶けこんだ羊飼いは “one life” を営んでおり、彼の本性は気高いもの、と意識されることになる。

一般的に言って、我々が人を愛する時、愛の対象になる人物には、我々の愛情を喚起する属性がある筈である。Wordsworth は、自然愛は人間愛に至ると言っているが、この主張が万人に承認されるためには、自然は、人間は愛に価する属性を所有していることを我々に教えるのだ、ということを実証しなければならない。私は、*The Prelude* 第八巻にみられる Wordsworth のそのような主張を二つの角度から検討してきた。その内容を要約すれば次のようになる。まず、自然は、人間の外観を崇高なものに変容させ、人間に気高さと、尊厳性を付与する。又、Wordsworth の想像力は、崇高な自然に接する時、“the sentiment of Being” に代表されるものの存在を感じる。そして、そのような自然に、人間が溶けこみ調和している時、彼は、人間の本質は気高いものと意識した。かくして、崇高な自然景観を介して人間と交わることにより、Wordsworth の心には、人間に対する先入の好感が形成され、それが彼を人間愛に導いたのであった。

IV

Havens は、*The Prelude* 第八巻の Wordsworth の論証には、難点があることを指摘している。それは次のようなものである。Wordsworth が、人間の気高さ、尊厳性について語る時、彼は、自分の想像力が邪魔されない立場から発言している。そのために彼は、人間の醜惡な側面に十分眼を向けず、細かな点は無視している⁵⁾。私は、Havens の指摘は妥当なものと思うが、こうした指摘がなされる原因は、Wordsworth の想像力に内在していると考えられる。

第三章でみてきた Wordsworth の人間観は、自然と想像力が、人間の属性を気高いものに容れさせることに立脚している。

Men did at the first present themselves
Before my untaught eyes thus purified,
Remov'd, and at a distance that was fit. (*Prel.*, VIII, 438—440. My italics)

この引用文にみられるように、Wordsworth は、自分の想像力が活動しうる距離を保ちながら人に接した。それ故に、彼は、自分が畏敬の念をいだいた人々の全人格に注意を払ったとはいえない。とすれば、事実を重視する人々から、Wordsworth の人間観は現実に根ざさないものだ、という批判が起りかねない。

次の詩行には、そのような人々に対する Wordsworth の反論がみられる。

Call ye these appearances

Which I beheld of Shepherds in youth,
This sanctity of Nature given to Man
A shadow, a delusion, ye who are fed
By the dead letter, not the spirit of things,
Whose truth is not a motion or a shape
Instinct with vital functions, but a Block
Or waxen Image which yourselves made,
And ye adore. (*Prel.*, VIII, 428—436)

これらの詩行で Wordsworth は、読書のイメージを用いながら、彼が羊飼いにいだいた想念を實體のない影と呼ぶ人々反論している。全体の要旨は、書物を読む場合、大切なのは、その本質をとらえることである。ところが、彼の想念を批判する人々は、書物の字義的解釈に縛られ、彼らの捏造したものを、あたかも本質であるかのように錯覚している、といったものである。

この反論は、Wordsworth の苦渋に満ちた体験から生まれた思想を背景にしている。第Ⅰ章で簡単に触れたように、彼は、フランス革命を契機に精神的危機に陥り、分析的理性に頼りすぎた結果、自然から遊離してしまった。*The Prelude* の第十一巻によれば、分析的理性は、次の三点において、彼が少年時代のように自然と交流することを妨げたのであった (ll. 138—176)。第一は、当時流行の picturesque の観念を、自然観賞の基準として導入する気にさせたことであるが、Wordsworth は、これは、自分にさしたる実害を与えなかったと思っている。二つ目は、自然の事物の細かい差別や新奇さを求めるあまり、事物が人間に対して持つ意義（例えば、*“the moral power/The affections, and the spirit of the place,”* ll. 162—163. *My italics*）に鈍感になったことである。そして第三にあげられるのは、人間の認識活動の二つの構成要素である、感覚と精神のうち、感覚、時に目が支配的になったことである。私は、第二、三の障害は、同じ源から発していると思う。即ち、Wordsworth が感覚でとらえられる現象を過度に重視し、瑣細な区分にこだわったために、彼の精神の働きが阻害され、自然と接する時に、想像力が十分に機能しなくなったのである。

以上のことを踏まえながら、もう一度 *The Prelude*, VIII, 428—436 を検討してみよう。*“the spirit of things”* (*Prel.*, VIII, 432) と *“the spirit of the place”* (*Prel.*, XI, 163) といった用語上の類似性などから明らかなように、書物を字義的に解釈する人々とは、分析的理性に支配され、事物の現象面にしか注意を払わない人々を指している。彼らが人間の本質を看過するのは、彼らの人間観が、想像力ではなく、感覚の知識に基いているためである。このような Wordsworth の反論は、暗黙のうちに、感覚と、想像力の真実という二重の真実を前提としたものである。そして彼は、後者の質的優位性を主張することにより、自分に向けられた批判を相手に投げ返し、自分の立場を弁護している。

私は第Ⅲ章において、Wordsworth の自然観には、存在様式で区分すれば、現象界と「未知の存在様式を持つもの」、認識の方法によれば、感覚と想像力の二層構造がみられることを述べた。そ

して Wordsworth は、想像力で把握される「未知の存在様式を持つもの」を、現象界の上位にしているが、その考え方は、彼の人間観にもみられるわけである。とすれば、これまで扱ってきた Wordsworth の反論は、究極的には、想像力が把握したものが真実であることを、どのようにしたら立証できるのか、という点に関係してくる。The Prelude 第十三巻にある Snowdon 登頂のエピソードは、この疑問に対する Wordsworth の回答である。

1791年頃、Wordsworth は Wales 地方を徒歩旅行し、その際に彼は、友人 R. Jones とともに Snowdon 山に登った。彼らは山頂で日の出をみようとして夜半に出発した。行手を深い霧が覆う中で、彼らは各々が黙想にひたりながら一時間ばかり進むと、地面が明るくなった。月が姿を現わしたのであった。眼前では、山々が霧の海の上に屹立していた。彼らから $\frac{1}{2}$ マイルも離れていないところに霧の裂け目があり、そこからさまざまな水音が、一つに溶けあって響いてきた。Wordsworth は、その裂け目に自然が、「この景観全体の魂、想像力」(“The Soul, the Imagination of the whole”, l. 65) を据えたと感じ、それから次のような想念を抱いたのであった。

A meditation rose in me that night
 Upon the lonely Mountain when the scene
 Had pass'd away, and it appear'd to me
 The perfect image of a mighty Mind,
 Of one that feeds upon infinity,
 That is exalted by an underpresence,
 The sense of God, or whatsoever is dim
 Or vast in its own being, above all
 One Function of such mind Nature there
 Exhibited by putting forth, and that
 With circumstance most awful and sublime,
 That domination which she oftentimes
 Exerts upon the outward face things,
 So moulds them, and endues, abstracts, combines,
 Or by abrupt and unhabitual influence
 Doth make one object so impress itself
 Upon all others, and pervade them so
 That even the grossest minds must see and hear
 And cannot chuse but feel. (ll. 66—84)

Wordsworth が目撃した景観において、自然は水音、あるいは月光によって、事物の外面を形づくり、それに付加、抽象、結合作用を加え、或る事物の印象を全体に及ぼしたりしながら、その変容力を示していた。彼には、この自然の姿が「壮大な精神の完全なる姿」(“The perfect image of a mighty Mind” l. 69) と、「そうした精神の一つの機能」(“One Function of such mind” l. 74) を提示しているように思われた。「壮大な精神」とは、無限について想いを凝らしたり、あるいは存在様式において茫洋として、広大なものを想うことによって高められる精神であり、想像力に恵まれた精神を総称するものである。こうした設定から Wordsworth は、自然の変容力と、精神のそれとの照応関係に想いをめぐらす。この場合、自然は「壮大な精神」に、音や光に代表される自然の変容力は、精神の「一つの機能」即ち想像力に、そして、外観を変えられた景観は、想像力の作用を受けた事物に対応することになる。

だが、自然の変容力と精神の変容力の照応関係を指摘しても、想像力が真実を把握しようということ十分に証明したことにはならないであろう。第十三巻 II.68—73 と第二巻 II.323—329 にみられる用語の類似性などから判断すると、このエピソードにおける想像力も “the visionary power” である。第Ⅲ章で触れたように、“the visionary power” は、自然と交わるうちに、精神が持つことになる心的傾向だとすれば、想像力は、人間の精神に備わる一つの能力にすぎない。とすれば、想像力の変容力も、結局心理作用の一つに過ぎなくなってしまう。想像力に客観的基盤を与えるには、自然との照応関係を指摘するだけでは十分でなく、想像力を、人間の心理活動の範囲の外におくか、「未知の存在様式を持つもの」の客観的实在性を示すかしなければならないであろう。そうしない限り、Wordsworth が羊飼いに付いていただいた想念は、感覚の事実を重んずる人々からの批判にであう可能性を内包しつつけよう。

V

私はこれまで、*The Prelude* 第八巻における Wordsworth の人間観を明らかにしようつとめてきたが、彼の人間観は想像力と密接に関連したものであった。しかし、想像力は、事実を重んずる人々の批判にさらされる可能性があり、彼の人間観が、万人に受容される真実とはなりえない面を持っていた。こうした事態において、後半生の Wordsworth が採った道は次のようなものであったと思われる。即ち、想像力と、感覚の真実という二重の真実を想定し、前者が後者によって否定される危険がある時に、前者の、人間生活における意義と、それを信じることから生ずる幸福を強調することである。このような考えに辿りついた時、Wordsworth は、既に証明の努力を放棄していたといえよう。だが、いわゆる驚異の十年間の少なくとも前半において、彼は、真実の二重性に頼らないで、想像力の真実を裏付けようとしていた。私には、その一つの方法が観察であったと思われる。小論第Ⅱ章で触れたように、Wordsworth は、彼の人間観を育んだものとして、想像力による人間についての気高い想念と「油断ない眼」をあげている。そして、この二つがともに自然から与えられた、と述べることににより、彼は、この二つが補完関係にあることを暗示していたのであろう。従って、*The Prelude* においては、想像力による人間観が、観察によって確認される、という構想になっていたと考えられる。それ故に、Wordsworth の人間観にみられる想像力と観察の関係を研究することは重要なことと思われるが、この点については稿をあらためて論じてみたい。

付 記

私は「*The Recluse* の Prospectus にみられる二つの概念(Ⅰ)」「(Ⅱ)」を、高知女子大学紀要、人文・社会科学編第29巻、30巻に書いているが、小論は、「*The Recluse* の Prospectus にみられる二つの概念(Ⅲ)」の一部となる筈のものであった。内容が予想した以上に長くなったために、このような形で独立した論文になってしまったが、小論が問題として扱うものは、前述の論文(Ⅰ)、(Ⅱ)からの続きであることをおことわりしておきたい。

注

- 1) Prospectus to “The Recluse”, l. 41
- 2) E. de Selincourt and C. L. Shaver (eds.): *The Letters of William and Dorothy Wordsworth: The Early Years 1787—1805* (Oxford: Clarendon Press, 2nd ed., 1967), p. 355.
- 3) R. D. Havens: *The Mind of a Poet: A Study of Wordsworth's Thought* (The Johns Hopkins Press, 1941), I, 112.
- 4) *The Prelude* (1805), VIII, 62—68. *The Prelude* からの引用は、すべて1805年版からであり、以下においては、引用文の末尾に引用箇所を示す。
- 5) *The Mind of a Poet: A Study of Wordsworth's Thought*, I, 108—111.